



# 東京多摩プロバスニュース

第 35 号

■事務局：〒206-0034 東京都多摩市鶴牧 5-29-10 平田方 ■編集・発行：編集委員会 2011.3.2  
■電話・FAX (042) 338-7022 ■URL: <http://www.tokyo-tama-probusclub.com>

## 知恵と経験を生かし、地域社会に発信しよう

### 第 79 回 定例会

日 時：平成 23 年 1 月 12 日(水)午後 1 時 30 分より  
場 所：つむぎ館第 1 会議室  
出席者：29 名(会員数 36 名)

### 第 80 回 定例会(昼食会を含む)

日 時：平成 23 年 2 月 2 日(水)午後 12 時 30 分より  
場 所：多摩永山情報教育センター内レストラン「美膳」  
出席者：30 名(会員数 36 名)

### 理 念

1. 豊かな人生経験を生かし地域社会に奉仕する
2. 活力ある高齢社会を創造する
3. 会員同士の交流と意欲の向上をはかる
4. 非政治的、非宗教的、非営利的であることとする

◇◇◇ ごあいさつ ◇◇◇

### 新しいふるさと

研修・親睦委員長 関根正敏

私が家族とともに多摩ニュータウンに移って来たのが昭和 51 年(1976 年)だから、多摩に住んで今年で 35 年になる。会社に勤めていた頃は家に寝に帰るだけで、土曜日・日曜日も海外出張などで家を空けていたから、同じ町内の人の顔も良く判らないし、市内の地理もトンと不明であった。海外出張の特に多かった同じ会社の某先輩は、久しぶりで我が家に帰り翌朝出勤の際、まだ小さかったお子さんが「また来てね」と手を振ったという、笑えない逸話がある。

還暦の年に会社を早期退職して以来、多摩には縁があふれているのを改めて実感している。しかし、新しく創られた街並みの住民の殆どが他所からの寄り合いで、私の生まれ育った新宿十二社のような気安さが感じられないのはいささか寂しい。そんな時、当クラブ入会のお誘いをいただいた。入会してみて会員の経歴と見識の高さに圧倒されている。更にもまして多摩を愛する心情は並大抵ではない。そして「豊かな人生経験を生かし地域社会に奉仕する」との当クラブの理念をまさに実践されている。

正直なところ、私にとって多摩は馴染めない土地柄であったが、このごろやっと「今住む街が新しいふるさと」といえる気がして来たのも当クラブのお陰と感謝している。同時に、これまでの経験をどうしたら地域社会に生かせるかが目下の課題である。



馥郁と梅の香漂う落合「青木葉通り」

## 1.幹事報告

定例会（1月12日・2月2日）

- 1) 12月18日、「東京多摩ロータリークラブ」主催第6回多摩市中学生俳句大会の表彰式が多摩センター新都市センターで行われ、鴻池敬和会長と神谷真一幹事が参加。
- 2) 1月18日の選考委員会で次期理事の候補者が次のように選ばれた。  
副会長：中村昭夫、幹事：稻田興、会計：山田正司、総務：北村克彦、研修・親睦：滝川益男、地域奉仕：西村政晃、広報：増山敏夫。
- 3) 2月24日、「東京八王子プロバスクラブ」第15回生涯学習サロン開講式に、鴻池敬和会長・大澤亘副会長・神谷真一幹事・阪東熙子会員の4名が参加予定。

## 2. 委員会報告

### 2.1 総務委員会

西村政晃委員長

- 1) 1月度定例会（1月12日）出席：29名 欠席：7名  
会場：つむぎ館。
- 2) 2月度定例会（2月2日） 出席：30名 欠席：6名  
会場：多摩永山情報教育センター内「美膳」  
①「会員手帳」第2版を全会員に配布。  
②環境問題プロジェクトが「多摩プロバスクラブが取組むエコ活動」と題して座談会を行った（内容右欄）。

### 2.2 研修・親睦委員会

関根正敏委員長

- 1) 1月12日（水）  
定例会後、第3会議室（和室）に移動し、「新春カルタ大会」を開催。  
委員会別に4グループに分け、しばし年齢を忘れてカルタや双六で競った。
- 2) 2月2日（水）定例会の前に「昼食会」を開催。  
会員同士もっと話し合えるようにとの配慮からであつたが、好評であれば今後も開催を検討したい。



研修・親睦委員会の皆さん

### 2.3 地域奉仕委員会

滝川道子委員長

「プロバス寺子屋そろばん教室」が古澤靖雄会員の熱意と蓮池守一副委員長の御尽力で今年も始めました。昨年12月急遽南豊ヶ丘小での取り組みには、大澤亘副会長・神谷真一幹事の応援ありがとうございました。2月には東寺方小・瓜生小・多摩第二小での「そろばん教室」が予定されており、大勢の会員の方々のお手伝いをいただきますが、子供たちと関わる時間を大切にしていきたい。

### 2.4 広報委員会

平田哲郎委員長

「東京多摩プロバスニュース」第34号を1月12日に発行し、ホームページも見直しをし、35号の編集に取りかかっています。

## 3. 座談会「エコ活動への取組み」 稲田興リーダー

第80回定例会（2/2）において、表題に関する座談会を開催。昨年3月に発足した“環境問題プロジェクト”的メンバーが、これまでに調査・検討を進めて来た7項目について、内容を説明しながら質疑応答をし、プロバスの活動として取り組んでいくべきテーマをアンケート形式で提出していただいた。



座談会  
風景

提案の7テーマは以下の通り。

- ①マイツリー計画への参加：平成27年度までに都道の街路樹を100万本まで倍増する計画に賛同し寄付を行う。平成22年度計画には、多摩市内の町田日野線・小山乞田線2ルートが含まれている。管理はすべて都が実施。
  - ②多摩桜プロジェクトへの参加：「桜の美しいまち多摩市」の実現を狙いとして、桜の観察や管理を通じて桜に親しむ・桜の植樹活動・会員の交流などを行う多摩市商工会議所主導の活動。個人年会費2千円/人。
  - ③養蜂プロジェクト：養蜂による緑化の促進を図る。将来発展させてプロバス養蜂農園（コミュニケーション場造り）へ。蜂蜜という収穫物もある独自活動。
  - ④市内の清掃活動：川とか駅前とか公園などの定期的な清掃。河川敷のゴミ集めや緑地のどこかーか所を分担して独自にやるか、青少協への参加なども…。
  - ⑤里地・里山保全活動：市の管理しているどこかーか所を分担して、下草刈りや枝打ちなどの労務奉仕。
  - ⑥希少動植物の保護活動：多摩市の身近な生き物（トンボ・カエル・メダカ・ホタルなど）・植物（タマノカンアオイ・キンラン・ギンラン）の調査や保護活動。学校教育の支援活動なども…。
  - ⑦啓蒙活動（イベント等の企画）：見学会・シンポジウム・卓話「エコハウスとエコな暮らし方」・事例発表による会員の勉強を中心に進め、いずれは小中学校での環境教育の支援を行っていく。
- アンケートの結果では、体力的な問題もあり、労務奉仕よりは啓蒙活動に重点をおいた活動を志向したいとの希望が多く、上記⑦が最多得票（18票）で、以下①マイツリー計画（14票）、②桜プロジェクト（13票）、③養蜂プロジェクト（12票）、④清掃活動（12票）の順であった。環境問題プロジェクトでは、この結果を踏まえてこれから具体的な取組みを検討していくことにする。

## ◇◇◇ 新年かるた大会 ◇◇◇

### 新年かるた大会

1月12日、つむぎ館、定例会終了後プロバス初の新年かるた大会！会員の皆様、最初は戸惑ったのではないかでしょうか。えっ？かるた！百人一首？いえいえ「犬棒かるた」です。「あの犬も歩けば棒に当たる」です…と何人かの方とやりとりしました。

そもそも発端は、我が家孫達（3歳半を頭に三人）と絛毛氈を敷いてかるた大会をするのが夢でした。その



かるた取りに熱が入る会員の皆さん

ためわざわざ神田の奥野かるた店まで買いに行き、通販で取り寄せたりして、4種類のかると双六を揃えました。でも、少し年齢的に早かったようです？

さて、このかるたどうしましょう。ふつと思いつきました。プロバスの皆さんで、子供に戻っての委員会対抗かるた大会はどうかしら。早速、理事会で研修・親睦委員長の関根正敏さんに相談。“いいですね”と乗って下さり、地域奉仕委員会と研修・親睦委員会合同での開催となりました。当日までに委員会対抗をどういう形で運営するのか試行錯誤がありましたが、無事開催することとなり、当日を迎えました。

景品として皆さんに配られるものとして、1位みかん、

2位中村屋のお菓子、3位お煎餅を用意できました。いよいよかるた大会、関根委員長から進行方法について説明があり、各委員会から3グループに2名ずつの選手を出し、読み手を決めて大会の開催です。

一人が3種類のかると双六に参加し、取り札の枚数の合計で1、2、3位が決定します。

江戸犬棒かるた（関西犬棒かるたもあり）

俳句かるた（松尾芭蕉と藤村の俳句）

奈良かるた（遷都千年記念かるた）

そして、双六（東海道中膝栗毛）

1回戦、2回戦、3回戦、双六と進みます。読み手は声美人の平田哲郎、池田寛、蓮池光枝会員。

各グループともにすごい熱気と真剣さでかるたを囲み、読み手の声が聞こえないほどの笑い声と、一枚ごとに揃えた膝が前に進み、取り札を前かがみに睨みつける姿に、思わず笑いが込み上げました。取り終えて結果発表。総合順位 1位総務委員会、2位地域奉仕委員会、3位研修・親睦委員会でした。

皆さん子供にかえって本当に上手でした。終わって机を並べ、景品のみかんとお菓子で一息入れて、楽しい第一回かるた大会でした。



大会後、一息入れて表彰

## ◇◇◇ ハッピー・バースディ ◇◇◇

### 「1&2月の誕生祝い」

7名の会員が誕生日を迎えるされました。

稻田 興会員（1月 3日）

池田 寛会員（1月 4日）

堀内陽二会員（1月 22日）

古澤靖雄会員（2月 4日）

蓮池光枝会員（2月 7日）

山田正司会員（2月 10日）

鴻池敬和会員（2月 11日）



誕生日を迎えた左から稻田・堀内・池田会員



蓮池会員



左から山田・鴻池・古澤会員

## ◇◇◇ サークル活動 ◇◇◇

### 釣りサークル

年の瀬迫る 12 月 21 日、釣りサークルの蓮池守一、岡野一馬、神谷真一、登坂征一郎の各会員と神奈川県城ヶ島沖で船釣りを楽しんできました。

早朝 4 時に多摩を出発し 6 時に現地着、チャーターした「一休丸」で 7 時出船、午後 2 時頃まで船釣りをして夕方 7 時に多摩着というやや強行スケジュールでしたが、事故もなく全員元気で至福の時間を過ごしてきました。

当日は多少波が高かったものの晴天で大潮という絶好の釣り日和に恵まれ、水深 50~60m の大物釣りに挑戦。本命のワラサ・イナダは釣れませんでしたが、アジやサバ・ウマヅラハギ・タイ・ホウボウ・サメなど多彩な魚が釣れて各人 10 四前後の釣果となりました。

昨年もお世話になった船長の話では「今年は異常気象の影響で潮流が変わり不漁続き」とのこと、地球規模で起きている洪水や干ばつ、寒波などと同様に、環境の異変を感じた次第です。

今回は寒さ厳しい日帰りの釣行となりましたが、また機会があれば温泉旅行でも兼ねながら、いまだ果たせぬ釣りキチの夢を追ってみたいと思っています。



城ヶ島沖の船釣り参加のみなさん

### 俳句「詠句会」サークル

### 池田寛会員

「詠句会」も本年 1 月 7 日で第 42 回の俳句勉強会を迎えるました。発足当時は俳句経験者と素人の混成で、素人の私は、皆さんにいつまでついていけるかと不安でしたが、昔の諺にある「石の上にも 3 年、門前の小僧習わぬ経を読む」の通り、今では多少自信が持てるようになりました。

さて、1 月 7 日の俳句勉強会は新年懇親会を兼ねての開講で、毎回兼題 2 句雜詠 2 句の勉強会のところ、1 月は兼題「寒の句」2 句のみの勉強会開講になりました。最近の会員の上達ぶりは驚くばかり、選句票提出に難儀しましたが、選句集計の結果、上位獲得票の会員には雪二先生直筆の色紙短冊の賞品が授与されました。勉強会を 1 時間で切り上げ、新年懇親会の会場「京王クラブ」に移動し午後 7 時から開宴しました。出席者は、雪二、春兎先生と会員の 19 名で、前菜・握り寿司・よせ鍋・デザートなど心のこもったお料理を満喫し、出席者全員のそれぞれ

ユーモアな挨拶に、会場は笑いに満ち溢れた楽しい 2 時間の懇親会でした。



詠句会の新年懇親会に参加したみなさん

### グルメサークル

### 阪東熙子会員

1 月 19 日に、12 名の会員がフランス料理店「シュークル」に集い合う。オーナー金井修治氏は、ジュネーブ・チューリッヒ・ローザンヌなどに渡欧・研修後、都内有名レストランを経て東府中に家庭的な店を開く。店名「シュークル」は、「修ちやん来る」の語呂合わせの由。

さて、店内靴音が心地よいのは、磨き込まれた床板が厚いためか。昔懐かしい黒板に、赤白チョークでお勧め飲み物やデザートが手書きされ、大小グラスの並ぶ棚には、アニメのいたづら羊のミニが数匹並んでいる。卓上は、緑と紫鳶色でまとめたセッティングで白い器が映える。笑顔の奥様好みと拝察。仔牛肉のジュレ寄せピメントチーズ添え、紫芋のクリームスープ、いずれも美味しい! 「いかがですか? そう、よかったです」とシェフがチャーミングな声で語りかけてくださる。かたや伝統を守る名シェフが、寸分違わぬ料理ケーキを作るより、オリジナルな品で客とコミュニケーションを持ちたいと願ったとのこと。茶事も心込めて、一汁三菜をもてなし、盃を重ね連客と和み、一般の茶を楽しむ。並べるのは誠におこがましいが相通じるところあり、嬉しくなる。

今回は、牛だったから次回は魚でと語りつつ店を後にした。ワインのほてりに、心地よい風が一瞬吹いた。

心も五味も大満足! 堀内プロビアンのご紹介に感謝。  
ちなみに「シュークル」は、フランス語の砂糖の意の由。



グルメサークルに参加したみなさん(後列中央はオーナーご夫妻)

## イタリア・シチリアの旅

昨年12月、イタリア、ミラノ在住の息子の案内でシチリアを訪れた。

長靴のような形をしたイタリアのつま先に接するシチリアは地中海最大の島であり、地中海文明の交差点で、キリスト教文化イスラム文化の融合した処である。また、フランス、スペインの支配が6~700年間続き、その圧政下で農民たちの反乱や蜂起は権力で抑えられていた。

この支配に対抗するため、現在のマフィアの伝統や組織が生まれたといわれている。

12月初め、ミラノ空港を発ち1時間半でシチリア島カターニア空港に着く。さすがに暖かい。アフリカと近い。滞在中の車を借りる。親子夫婦と孫5人。



地中海最大の島で面積は九州の約64%。

人口約5,090千人

## 岡野一馬会員



シラクーサの海岸

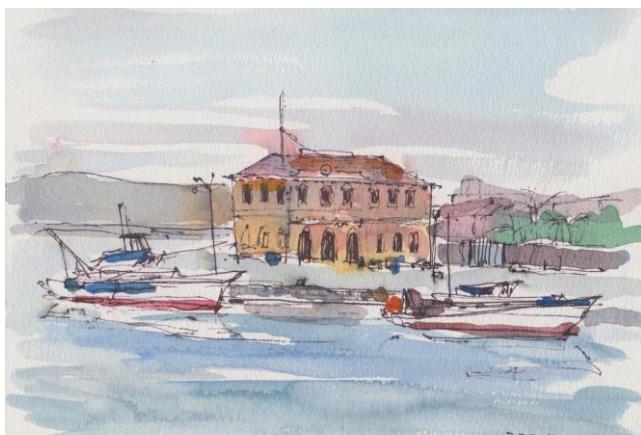
運転は息子。家内と嫁（イタリア人）は片言の日本語、イタリア語で会話が続く。私はもっぱら2歳の孫の相手である。車はオリーブが植えられた緑の緩やかな丘陵を結構なスピードで走る。イタリア風の運転は馴れるまで少々怖い。

シリエ東海岸（イタリア本土側）カターニア・タオルミーナを経てシラクーザに着き、泊まる。

「カターニア」：古い遺跡や数多くのバロック建築が残っている。エトナ山の噴火に苦しめられながら、破壊と再建を繰り返し、シチリア第二の都市となっている。

「タオルミーナ」：紀元前300年に建設された野外のギリシャ劇場を見る。空と海とエトナ山を背景とした素晴らしい舞台で、今も演劇、バレエ、コンサートが催されているという。

その後、シラクーザ、ラグーザ、ノートを経てカターニアより空路ミラノに帰る。



シラクーザ 沿岸警備隊庁舎（ホテルの窓より）



シラクーザ 海岸の古城



モディカの宿（民宿風）



## 「バロッサ・ランデブー2011」



10月9—14日、バロッサ・バレー（南オーストラリア州アデレード市近郊）で開催される。主催は「南太平洋プロバスセンター」（オーストラリア・ニュージーランドの拠点）。バロッサ・バレーは標高約270mの渓谷地帯。19世紀中頃にドイツ系移民が開拓した地域で、人口は約2万。



馬車に乗って史跡

オーストラリアの10月は春到来の心弾む季節。ランデブー参加者は、渓谷一帯に散在する葡萄園で世界最古の「シラーズワイン」の試飲が楽しめる。美味しいパンや燻製のハム、職人手作りの食料品も豊かで、

ワイン党やグルメ党にはまさにパラダイスである。

### ワインの特産地

今回の「バロッサ・プロバス・ランデブー」は、この地方の風土を楽しむ観光ツアーが主体。

「南太平洋プロバスセンター」は呼びかけている——「プロビアンの皆さん、最高級のワイン、起伏に富む丘陵、風光明媚な町並み、石造のルター教会、古風なコテージを巡るツアーを楽しんでみませんか？」

### イベント・費用

（航空運賃・宿泊費は別）



風光明媚なバロッサ・バレー

＜親睦イベント＞歓迎ディナー（\$85.00）基調講演「もう暴力はたくさんだ」（非暴力運動家ケン・マースリュー氏）ならびに討論会

＜日帰りツアー＞バロッサ史跡巡り（\$40.00）南バロッサ巡り（\$35.00）ペンフォールズワイン自作ブレンド体験ツアー（\$88.00）タヌンダ博物館巡り（\$35.00）ワイナリー試飲ツアー（\$30.00）汽船での川めぐり（\$48.00）アンガストン史跡巡り（\$35.00）

＜半日ツアー＞ペンフォールズワイン自作ブレンド体験ツアー（\$85.00）アンガストン史跡巡り（\$40.00）



極上のワインを試飲

各所ワイナリー試飲ツアー（\$30.00）

＜イブニング・イベント＞ミステリー・ディナー（光のショー）（\$50.00）観光船でイルカ探検——ボートリバー（\$60.00）

### ＜親睦イベント＞お別れディナー

（\$65.00）

＜宿泊施設＞高級ホテルからB&Bまで。宿泊費もホテル（シングル）平均\$200—\$150、キャビン（山小屋風）\$100—\$80。申し込みに応じて主催者側が手配する。初期申込（アーリーバードという）4月末日、一般申込9月9日。

（\$表示はオーストラリアドル。米ドルより心持安い）

### プロバス・ランデブーの淵源

毎年恒例の国際大会「プロバス・ランデブー」は、いつ、どのようにして始まったのか？その淵源は？「南太平洋プロバスセンター」によれば、

——すべてはある「ひと言」から始まった。それは、ティツリー・ガリー市（南オーストラリア州）に住む、ハリー・ドゥルーリー氏の「ひと言」。1988年、ドゥルーリー氏は、ウエストレイクスPC主宰の“全豪プロバス第950地区（現第9500地区）セミナー”の折、何気なく、「一度オーストラリア全土の、いや世界各地のプロビアンが、みんなして集まってみたいものだ」と呟いた。

### みんなで集まろう

この「ひと言」に触発されて運営委員会が発足。委員長に当のドゥルーリー氏、委員にF・ペインター、C・ルパ

ージらが選ばれ、1989年10月、第一回会議をバロッサ・バレーのミニホテル「葡萄館」（在ヌリオトバ）で開催。その後ドゥルーリー氏らが、ダービーで名高いモルフェットヴィルの“第952地区（現第9520地区）セミナー”に出席。この席上、「ひと言」の発想が熱狂的に歓迎された。

その後、会計係など運営委員会メンバーが増加し、バロッサ・バレーのタヌンダ町役場を会場に、討議を重ねていった。この間、運営委員たちの頭に浮かんだのは“セミナー”でも“コンベンション”でもなく、プロバスの仲間意識と友好親善を深める「みんなで集まろう」の精神だった。

最終的に「みんなで集まろう」の精神を表わすドイツ語のテーマ「91ランデブー・ヘルツリッヒ・ヴィルコメン（心から歓迎）」が決定。1991年4月19—21日、「第一回プロバス国際ランデブー」がバロッサのタヌンダ町で開催された。「プロバス・ランデブー」はこうして始まったのである。当準備委員会は、今回の『2011バロッサ・プロバス・ランデブー』へ皆さんを「ヘルツリッヒ・ヴィルコメン」心から歓迎します。

（滝川益男会員 訳・記）

\*写真提供：南オーストラリア州観光局



Toll Free Australia 1800 758 455  
Toll Free New Zealand 0800 477 617  
Email: probus@probussouthpacific.org  
www.probussouthpacific.org

## お茶の誕生と日本への伝来

私達が毎日飲み親しんでいる“お茶”。この“お茶”には緑茶・烏龍茶・紅茶など沢山の種類がありますが、これらは発酵度合いの違いによるもので、元々は同じ茶葉（学名カメリア・シネンシスといわれるツバキ科の植物）から作られます。茶の木は中国の南部に樹齢2700年ともいわれる野生種の巨木が存在しますが、一体「喫茶」というお茶の飲み方がいつ頃から始まったのか？という疑問にとらわれて、調べて分かったのは、中国と日本にそれぞれお茶の元祖たる人がいたことがありました。

### ◇お茶のはじまり

現在のお茶の飲み方とは異なるが、お茶という文字が文献に現れたのは、「三国志」（三世紀）が最初で、「吳の人 茶を採り、これを煮る」とあります。この頃のお茶は、雲南沱茶といわれ、煮たお茶の葉を固めてお椀状にし、飲む時に必要な分を削って煎じて飲むものだったらしい。初期の喫茶の中心は現在の四川省で、ここは黒茶や固形茶など、古い形のお茶の文化を今に伝えている土地柄でもあります。

### 稻田興会員



雲南省西双版納  
の茶樹王（野生）

### ◇ “喫茶文化” の誕生

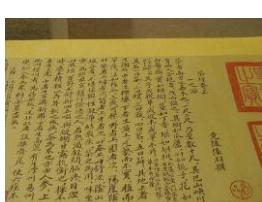


陸羽像  
(中国茶博物館の庭  
浙江省杭州西湖の西  
龍井茶の里)

今につながる喫茶文化の直接の幕開けとなったのは、唐（7-10世紀）の詩人・陸羽（733-804）が著した「茶經」です。当時のお茶のいれ方は、団茶と呼ばれる固形茶を焼いて削り、塩や葱、生姜、みかんの皮などを加えて煮出すというものでしたが、陸羽は「お茶本来の味がわからない」と批判し、煎茶法といういれ方を考案した。

これは、固形茶を挽いた粉を煮出す方法でしたが、水選び・器選びにこだわり抜いてお茶の風味を引き出し、喫茶を一つの芸術体系として確立させたため、「茶經」は今に至るまで茶をたしなむ人の聖典となっております。

この書には、お茶の起源・効用・産地・製造法・飲用法や茶道具などお茶に関するすべてが詳細に記載されており、日本にお茶を広めた栄西の「喫茶養生記」は、これを基にして書かれております。



同博物館所蔵の「茶經」

### ◇日本では…

お茶を飲む習慣と茶の製法は、平安時代に遣唐使によって中国からもたらされました。しかし当時のお茶は現在のプーアル茶に似ただんご状の半発酵茶で、嗜好品としてではなく薬として用いられており、必要量のみを煎じて飲んだと伝えられています。非常に貴重なものですから、貴族社会や僧侶の一部でだけ用いられ、遣唐使が中止されると間もなくこの“お茶”は廃れてしまいました。

[補足]平安初期（815年）の「日本後記」には、「嵯峨天皇に大僧都（だいそうず）永忠が近江の梵駁寺において茶を煎じて奉った」とあり、これが、わが国における日本茶の喫茶に関する最初の記述といわれています。

### ◇日本での普及

その後しばらく時を経て鎌倉時代に、日本に禪宗を伝えた栄西和尚（1141-1215）によって薬として持ち込まれた抹茶が、禪宗の広まりと共に精神修養的な要素を強めて広がりを見せ、さらに茶の栽培が広範囲に行われるようになって、茶を飲む習慣が一般に普及していきました。

お茶の栽培は栄西が、中国より持ち帰った種子を佐賀県脊振山（せぶりさん）に植えたのが始まりだといわれています。その後、京都の明惠上人（みょうえじょうにん）が栄西より種子を譲り受け、京都梅尾（とがのね）に蒔き、宇治茶の基礎をつくるとともに、全国に広めていきました。

当時のお茶は、蒸した茶葉を揉まずに乾燥させたもの（碾茶=てんぢゃ）で、社交の道具として武士階級にも普及していました。

栄西は中国での4年間の修行で茶の養生延齢の効力を認めたからということとともに、その不眠覚醒作用が禪の修行に必要であり、禪宗の行事に茶礼が欠かせないことも、その普及の動機の多くを占めていました。承元5年（1211年）「茶は養生の仙薬なり…」で始まる「喫茶養生記」を著します。

この書物は上下二巻からなり、茶の薬効から栽培適地、製法まで、細かく記されています。

こんな歴史をひもときながら、植物の力と人類の知恵の結晶である一杯の“お茶”をじっくり味わってみましょう。



栄西和尚



「喫茶養生記」



梅尾高山寺境内の日本最古の茶畠

## ◇◇◇ 私の一品 ◇◇◇

### 骨董好きの私のルーツ

大きな長いクイが地下に何本も埋め込まれている様子を見つめている子供がいた。そこはビルの基礎工事で、連日近所迷惑な音を立てクイ打ちをしていた。その時、掘り起こした穴の中に何か違った質感の物体を、子供は発見したのである。その時私は小学校四年生。私立に通学していたため近所に友だちはなく、もっぱら兄達とチャンバラごっこに明け暮れ、家庭教師に搾られ……。

そんな日々の中で、父の会社の建設現場を父にねだって連れて行ってもらった時の出来事だった。工事を請けていたのは「間組」だったと思う。掘ってあった穴の下には水が溜まっていたので、今思うと地盤がよくないのでクイを何本も打っていたのだと思う。

私は土の中から少し顔を出していた茶色の物に興味がわき、父に頼み現場監督さんに取り出してもらった。ドロドロの土といっしょに手渡されたのが写真の品。江戸時代の一合徳利だった。新聞紙に包んでもらい大事に抱えて家に持ち帰り、水で洗った。ドキドキ、ワクワクしながら洗ったことを今でも覚えている。

それから私はその徳利を磨き込み、今でも一輪挿しとして愛用している。子供ながらに古い物や職人の丁寧な仕事を見つめるのが大好きになった。私は学校帰りに建築現場があると必ず寄り道。ベルトコンベヤーに乗ったセメントを、ねこ車に移して高い所を軽く運ぶおじさん達の足さばき、畳屋さんの肘で糸を締める音、霧を口からパッと吹く姿と技、常に感動していた。

六年生になって一人の転入生A子さんと友達になった。

### ◇◇◇東京多摩プロバスソング◇◇◇

作詞 池田 寛  
作曲 中村 昭夫

聖の桜仰ぎつつ 多摩の流れに身を清めて  
緑の杜に囲まれた 我が故郷の行く末と  
社会奉仕に力をそそぐ  
集う我等プロバスクラブ  
プロバス プロバス 多摩プロバスクラブ

富士を仰ぎつつ 心の業を磨き合い  
豊かな知識身につけて 次の世代の若人の  
教え導く糧となる  
集う我等プロバスクラブ  
プロバス プロバス 多摩プロバスクラブ

### 小西加葉子会員

(残念ながら親友のA子さんは二年前に他界。彼女は芸大を出た日本画家) 彼女の実家が旧家ですごい資産家だった。彼女の家は学校に近い麹町にあったため、私はいつもそのお宅に途中下車。車寄せのある玄関に入ると、室町時代の絡繆人形が座っていた。居間には日展や院展で入選した工芸品や絵が、何気なく飾ってある家だった。私は子供なのに、すごいカルチャーショックを受けた。また、他の友達の家も鎧や兜や鎧のコレクションなど、その見事な象嵌や蒔絵を手に取るように見るチャンスを与えられた。

江戸時代の職人の腕の確かさを目にした私は、日本人の美意識の高さに心が踊った。本物を見る知る悦びを噛み締めた。

若い時から武道、茶道に思いを寄せ、いつのまにか三十年、四十年。そんな遊び心で年を重ねてきたように思う。私の趣味のルーツは、土の中で眠っていた「一品の徳利」である。



「一輪挿し」に蘇った  
江戸時代の一合徳利

### ◇◇◇ 編集後記 ◇◇◇

梅がほころび春の兆しが伺えるようになりました。  
○関根委員長の「新しいふるさと」では、現役時代に誰もが味わったペーススがちらり……。会員共々スローガンのもと地域貢献できる活動につなげたいものです。

○初の試みの「新年かるた大会」は、年齢を超越した熱気に微笑んでしまいますが、滝川(道)会員の機知に富んだアイデアに喝采です。一方、「サークル活動」では、「釣」「俳句」および「グルメ」の各サークル活動は、充実したプロバスライフの一端が伺え、ますますの活発な活動の期待大です。

○岡野会員の「イタリア・シチリアの旅」は明るい地中海の様子が水彩画に描かれていて一枚一枚に深く感動します。

○滝川(益)会員の「バロッサ・ランデブー2011」の紹介は、

世界的な活動の関心を喚起することが期待されます。

○「お茶(歴史)」の稻田会員は日中文化の比較研究に熱心に取り組まれており、その一端を紹介して頂きました。

○「私の一品」は小西会員の多感な少女時代に「江戸時代の徳利」の思ひぬ発見から、連綿と培ってきた骨董への愛着が伺われます。

以上、今号も多彩な紙面となり筆者各位に感謝申し上げ、会員各位に活発なる寄稿をお願いする次第です。(登坂記)